

期待とは己を信じる強さだ。

今、改めてそれを実現できた自分を喜んで受け入れたいと思う。

近所にあつた東京体育館で空手の世界選手権を観に行つたのはまだ小学生だつた。当時、テレビや漫画の世界だつた別世界の様にも思えた空手は、選手達の強靱な肉体に垣間見える礼の所作、気骨稜稜とした雰囲気、足がすくんだ。

それから三十年が経ち、過ぎてきた人生の中でやりたかつた事、出来ずにいた「何か」にようやく向き合える一步を踏み出せた。

自分の強さを形にしたいと始めた空手。

あの頃目に映つた憧憬の選手たちに近づきたい想いが溢れた。

しかし、だからこそ甘い世界ではない事を、稽古を重ねる度に思い知らされた。

怪我は肉体を苦しめるだけでなく、己の脆さを知らしめる。何度も稽古から足が遠のいた。師範の厳然たる御指導、求められる心技

体を一体とする修練の先に黒帯と言う通過点がある事さえ、遠い遠い先の事のように思えた。一度目の黒帯への挑戦、昇段審査では緊張や勝つ事への心のコントロールが見事にできない自分を知った。技術ではない、先ずは自分の弱さを克服することだと教えて頂いた結果だった。

二度目、三度目と挑戦するも、己に勝てたかどうか自分がよく分かった。

「よく頑張った」と言う言葉はもはや見当違いだった。この審査を通じ、ようやく、勝負とは相手に勝つ事だけではないとする師範の言葉の深さを、理解できるようになった。

この時、空手を始めて十四年が経っていた。長い様で短い時間、短い様で長い長い黒帯への、自分への挑戦だった。諦める事、辞めてしまう事は己への期待を自分自身が裏切る事であるが、成し遂げる意味を曖昧なものにして、理由をつければ格好良く退けられる強さを知っている。私はそんな歳になっていた。

そんな迷いを払拭させてくれたのは、仲間達の私への温かい言葉だった。空手は個人競技、私一人で戦ってきたつもりでいたが、

「あと一步、その先で待っている」と声をかけてくれた言葉にどれだけの重みを受け取る事ができたか。私の長年の思いがあつたからこそ、この言葉に支えられた。四度目の挑戦は今の私がやってきた事への集大成で迎える心の準備ができていた。組手で相手と対峙すると相変わらず震えた足、緊張は変わらない。

しかし、師範にかけて頂いた私への御指導を実践しようと、身体が動いた。時間を忘れ夢中になって実践しようとする心と身体が一つになつていた。

稽古で培った洞察力、集中力がいつの間にかついていることに気がついた。

やり切った、今出せる全てを審査会で出し切れた。心の底から湧き上がった初めての感情だった。そうしてようやく手にしたあの憧れだった黒帯は、達成感よりも心技体を一体

とする武道家と呼ばれるには、まだまだ不足で未熟な己の課題を知らしめてくれるものとなった。

不思議な感情ではあるが、「初段」と口にするにはおこがましい思いで黒帯を授与される事は悪くない、そう思える自分に嬉しさが込み上げる。まだまだ己を知らない自分がいる、まだ知らない世界を知る事ができる。この空手への探究心と挑戦しようとする一念通天の心こそが、私の十四年間で手に入れた空手道だと思う。

二〇二一年十月十日 朴 永春